

旧聞日本橋

町の構成

長谷川時雨

青空文庫

一応はじめに町の構成を説いておく。

日本橋通りの本町ほんちようの角からと、石町こくちようから曲るのと、二

本の大通りが浅草橋へむかつて通っている。現いま今は電車線路のあるもとの石町通りが街の本線まちになっているが、以前もとは反対だった。

鉄道馬車時代の線路は両方にあつて、浅草へむかつて行きの線路は、本町、大伝馬町おおでんま、通旅籠町とおりはたご、通油町とおりあぶら、通塩町とおりしおと

つらなつた問屋筋の多い街の方にあつて、街の位は最上位であつた。それがいまいう幹線で、浅草から帰りの線路を持つ街の名は浅草橋の方から数えて、馬喰町ばくろ、小伝馬町こでんま、鉄砲町、石町と、新開の大通りで街の品位はずつと低く、徳川時代の伝馬町の大牢の

跡も原っぱで残っていた。其処には、弘法大師こうぼうだいしと円光大師えんこうだいしとにちれんそし日蓮祖師きしほじんと鬼子母神との四つのお堂があり、憲兵屋敷は牢屋敷裏門をそのまま用いていた。小伝馬町三丁目、通油町と通旅籠町の間をつらぬいてたてに大門おおもん通がある。

そこで、アンポンタンと親からなづけられていた、あたしというものが生れた日本橋通油町というのは、たった一町だけで、大門通りの角から緑橋の角までの一角、その大通りの両側が背中にした裏町の、片側ずつがその名を名告なつていた。私は厳密にいえば、小伝馬町三丁目と、通油町との間の小路の、油町側にぞくした角から一軒目の、一番地で生れたのだ。小路には、よく、瓢ひょう箆せん新道たんにんみちとか、おすわ新道とか、三光横町とか、特種な名のつ

いているものだが、私の生れたところは北新道、またはうまや新道とよばれていて、伝馬町大牢御用の馬屋が向側小伝馬町側にあった。この道筋だけが五町通して、本町石町から緑河岸みどりがしまで両側の大通りと平行していた。

面白くもない場所吟味はやめよう。以下、私の記憶のまま、年月など、幾分前後したりするかも知れないが――

しかし、アンポンタンの生活がはじまったのも、かなり成長してから眼界も、結局この街の周囲だけにしか過ぎない。で、最も多く出てくる街の基点に大丸だいまるという名詞がある。これは丁度いま現今三越呉服店を指さすように、その当時の日本橋文化、繁昌はんじよ地中心点うちであったからでもあるが、通油町の向う側の角、大門

通りを仲にはさんで四ツ辻に、毅然きぜんと聳そびえていた大土蔵造りの有名な呉服店だった。ある時、大伝馬町四丁目大丸呉服店所在地の地名が、通旅籠町と改名されたおり大丸に長年勤めていた忠実な権助ごんすけが、主家の大事と町札を書直して罪せられたという、大騒動があつたというほどその店は、町のシンボルになつていた。

問屋町の裏側はしもたやで、というより殆どほとん堀へいと奥蔵おくぐらのつづき、ところどころ各家の非常口の、小さい出入口がある。女たちがそつと外出そとでをする時とか、内密ないしよの人の訪れるところとなつてゐる。だからとても淋さびしい。私の家は右隣りが糸問屋の近与の奥蔵、左側は通りぬけの露路で、背中は庭の堀の外に井戸があり、

露路を背にした大門通り向きの幾軒かの家の、雇人たちのかなり
 広くとつた共同便所があり、それを越して表通りの足袋問屋と裏
 合せになつていた。左横の大門通り側には四軒の金物問屋——店
 は細かいが問屋である、この辺は、鐘一つ売れぬ日はなし江戸の
 春と、元げんろく禄の昔きかく其角がよんだ句にもある、金物問屋が角かどなみ並に
 ある、大門通りのめぬきの場処である——その他に、利久という
 蕎麦屋そばや、べっこう屋の二軒が變つた商売で、その家の角にほんと
 に小さな店の、ごく繁昌する、近所で重ちようほう宝な荒物屋があつた。
 小さな店にあふれるほど品が積んであつた。

煩うるさくはあるが、もすこし近所の具合を言っておきたい。荒物
 屋の向つ角——あたしの家の筋向いに横つぱらを見せている、三

立社という運送店の店蔵は、元禄四年の地震にも残った蔵だときいていた。左横に翼がついていて木の戸があつた。内には縄や筵こもが入れられてあつたが、そのまた向う角が、立派な土蔵づくりの八百屋、後には冬は焼芋屋になり、夏には氷屋になつた。その店の焼芋はすばらしく大きかつたので、遠くからも買いに来た。他ほ処かでは見られないことは、この家、この店土蔵だけの住居で二階が住家すみかであり、小さな物干場へは窓から潜くぐり出していた。芋屋の並びはほとんど金物問屋ばかり、火鉢ばかりの店もあれば金かなだらいや手水鉢ちようずばちが主な店もあり、襖ふすまの引手ひきてやその他細かいものの上等品ばかりの店もあり、笹屋という刃物ばかりのとても大きな問屋もあつた。銅、鉄物問屋はいうに及ばない。

大門通りも大丸からさきの方は、長谷川町、富沢町と大呉服問屋、太物問屋が門並だが、ここらにも西陣の帯地や、樹地などを扱う大店がある。

荒物やの正面向う角が両替屋で、奇麗な暖簾がかかっている、黒ぬりの※こういう看板に金字で両替と書いたのが下げてあった。その家はいつも格子がすつかりはまっついていて、黒い前掛けをかけた、真中から分けた散髪の旦那と、赤い手柄の細君がいる奇麗な小さな角店だった。その隣りが酒屋の物置と酒屋の店蔵で、そのさきが煙草問屋、煙管の羅宇問屋、つづいて大丸へむかった角店の仏具屋の庭の塀と店蔵だった。

あたしの家の真向こうに——三立社の尻にこの辺にはあるまじ

いほどささやかな、小さな小屋で首を振りながら、終いちにち日塩せんべを焼いているお婆さんがあつた。その隣家となりはこんもりした植込みのある——泉水などもある庭をもつた二階家で、丁度その塀を二塀ばかりきりとして神田上水の井戸があるのを、塩せんべ屋のお婆さんが井戸番をしているようなかたちだつた。あたしの家の裏の井戸は玉川上水だつた。

その二階家は「炭勘」という名の——炭屋勘兵衛とでもいつたのだろう。鼈べつこうざいくや甲細工屋のになつていたが、黒い三巾みすじの垂れ暖簾のれんにいりやま※の白ぬきのれんが、鼈甲屋とは思わせない入口もつとだつた。尤もそこは青柳おちややという会席料理だつたのだそうで、炭勘はその後うしろから前へ進入したのだ。お茶屋があつたからというわけではなからう

が、その隣りに阪東三弥吉という女の踊りの師匠がいた。その側そばに、私の父の俵くるまをうけもつて、他ほかに曳子ひきこを大勢おいていた俵くるまや宿どがあつた。

なんで細かく此処ここまで書いたかというに、前にも言つたように、私の家のならばは、窓ひとつもない、塀と土蔵裏と、荷蔵にぐらばかりつづいてゐるその向う側であるからで、俵宿までの町並は二間半たらずだが、そこからぐつと倍も広がつてゐる。それが、何故なぜかというと、三誠社という馬車うまぐるまを扱う大きな運送店があつて、その前身が、伝馬町の大牢の、咎人とがにんの引廻しの馬舎うまやだつたといふのだ。町巾まちばが其処そこだけ広がつてゐるのが妙に嫌な気持ちにさせる。俵宿と馬舎との間の地処にかこいをして草を植え、植木棚

をつくり、小さな祠ほこらを祭つて、毎朝表通りの店から散歩にくる老ろう旦うだん那なもあつた。

アンポンタンが三ツか四ツの時、額ひたいの上へ三日月形の前髪の毛をおいた。それまでは中剃りなかぞ（頭の真ん中へ小さく穴をあけて剃っていること）をあけたおかつぱで、ヂヂツ毛とおやつこさんをつけていた（ヂヂツ毛は頸えりのボンノクボに少々ばかり剃残そりしてある愛敬毛あいきよう、おやつこさんは耳の前のところに剃り残したこれも愛敬毛）。そのほかは青く剃りあげていたのへ、小さいお腕わんを伏せて恰好かつこうのよい三日月形を剃り残したのだ。その時向うのせんべやお婆さんが、剃刃をあてるのに動かないようにと、おせんべにするふかしたしん粉こをもつて来てくれて、あたしの祖母が、

狎ちんこしを拵こしらえて紅べにで色どつてくれた。それに味をしめて、さかゆきを
 をするたんびに、おせんべやの店へとりによくと、首振り婆さん
 は、私の家の門の桜の木の上へ出そめた三日月を指さして、

「のん、のん、此処ここにも、あすこにも。」

と、あたしの頭を指で押して、空をも指さすのだった。

お婆さんの息子は車しやりき力ちからだった。あたしは鹿かの子絞こしぼりの紐ひもを首
 の後うしろでチヨキンと結んで、緋ひ金かな巾きんの腹はらがけ（金巾は珍めづらしかつ
 たものと見える）、祖母おばあさんのお古ふるの、紹ろの小紋こもんの、袖そでの紋もんのと
 ころを背せにしたちゃんちゃんこを着せられて、てもなくでく人形
 のおつくりである。

——ある時（妹でも出来た時かも知れない）、理髮店かみゆいどこではじ

めて剃ってもらった時、私ははじめじぶくったが、あたしを抱いていた女中が大層機嫌がよかつたので、しまいにはあたしまで悦よろこんで膝の上で跳はねた。職人はたぶん女中の頸えりをおまけに剃つてやっていたのであろうが、あたしがあんまり跳はねるので、女中にもなやっこんしよで、ひよいと、あたしのお奴やっこを片つぽとつてしまった。あたしはなおさらよろこんだ。機嫌のよい女中におぶさつて帰つてくると、すぐおせんべやの首振りお婆さんに見せにいった。ただ笑つて、よろこんで指で毛のないあとを押し示した。

「あらまあ、お供ともさんが片つぽおちて——」

お婆さんは齒のない口を一ぱいにあいて笑つた。だが、この人は直じきなくなつて、おせんべやは荷車の置場に、屋根と柱だけが

残されるようになった。竹であんだ干籠ほしかごに、丸いおせんべの原形が干してあつたのも、その傍かたわらにあたしの着物を張つた張板はりいたがたてかけてあつたのも、その廻りを飛んでいた黄色の蝶と、飛び去つてしまった。

角の芋屋がまだ八百屋のころ、お其そのという小娘が店番をしていた。ちいさい時、神田から出た火事で此処ここらは一嘗ひとなめになつて、みんな本所ほんじよへ逃げた時、お其は大溝おおどぶにおちて泣き叫んでいたのであたしの父が助けあげて、抱かかえて逃げたので助かつたといつて、私の赤ん坊の時分からよく合手あいてをして遊ばせてくれた。だが、先方さきも正直な小娘である。店番をしている時、無銭ただでとつていたら泥棒とどなれと教えこまれていた。あたしはまた、お金とい

うものがある事を知らず、品物は買うものだということをしつとも知らなかつた。他人ひとのものも、自分のものも、所有しゆということをしらず、いやならばとらず、好きならばとつてよいと、弁わえなく考えていたと見え、ばかに大胆で、げじけしをおさえて見えたが、急に口へもつてゆこうとして厳しく叱ののられたりしたというが、その時そのも、お其そのの店の赤いものに目がついて、しゃがんで二つ三つとつた。お其はだまって見ていたが——たんばほおずきが幾個いくつ破られて捨られてもだまって見ていたが、そのまま帰りかけると、大きな声で、

「盗どろ棒ぼう、盗棒、盗棒——」

と喚わめきだした。もとより、あたしもお其にかせいして、盗棒とど

なつた。

諸方ほうほうから人が出て来たが盗棒はいなかった。するとお其はあたしに指さして、

「盗棒！」

と言つた。幼おさなごころ心にはずかしさと、ほこらしさで、あたしもはにかみながら、

「盗棒！」

とおうむがえしに言つた。みんなが笑つた。あたしの祖母がお褌つまをとつて来て、巾きんちやく着やくからお金を払い、お其にもやつた。八百屋の親たちはしきりにおじぎをした。

おせんべやの首振婆さんが私を抱えて帰つた。お其も遊びにつ

いて来た。

間もなくべつたら市の日^{いち}が来て、昼間から赤い巾^{きれ}をかけた小さな屋台店がならんだ。こんどはお其^{おき}があたしの後について、肩上げをつまんで離れずにいた。祖母や女中が目を離すと、コチヨコチヨと人ごみにまぎれ込んで、屋台のものをつまむので、そのたびにお其はハラハラしたのだろう大きな声で祖母をよんだ。祖母はニコニコして後からお鳥^{ちよもく}目を払って歩いて来た。

お其のうちには八百屋をやめて焼芋屋になった。店の大半、表へまで芋俵が積まれ、親父^{おやじ}さんは三つ並べた四斗樽のあきで、ゴロゴロゴロゴロ、泥水の中の薩摩芋^{さつまいも}を棒で搔廻^{かきま}わした。大きな、素張^{すば}らしく美事な焼芋で、質のよい品を売ったので大繁^{はんじょう}昌^{ちやう}だ

つた。三ツの大釜おおがまが間に合わないといった。近所が大店ばかりのところへ、遠くからまで買いにくるので、いつも人ばかりがしていた。一軒のお茶受けにも、店の権助ごんすけさんが、籠かごをもつて来たり、大岡持ちをもつてくるので、一釜位では一人の注文にも間にあわなかつた。忙しい忙しいとお其はいつて、鼻の横を黒くしていた。で私の遊び合手あいては、私あたしをも釜前かままえにつれていった。冬などは、藁わらの上うへにすわつて、遠火とおいびに暖められていると非常に御機嫌ごきげんになつて、芋屋の子になつてしまいたかつた。だが、困つたことに家の構造が、角の土蔵なので、煙のはげばに弱らされていた。住居すまひにしている二階あがの上ぐちり口へまつすぐに煙筒えんとつをつけて、窓まどから外へ出すようにしてあつた。だから、二階の梯子はしごはとりはらわ

れて、あたしたちの暖あたつている頭の上を、猿梯子ざるばしじをかけて登つてゆく、物干場は、一度窓から出て、他家よその屋根に乗り、そして自分の家の大屋根にゆく仕かけだった。

「売れすぎて損をするって。」

とお其は告げて、あたしの父を笑わせていた。父の晩酌ばんしやくのお膳ぜんの前に座るのを、あたしより前さきにもった特権だどこの小娘は信じて疑わなかった。

お其が私を紹介した買物のはじめは、角の荒物店だった。足あしも許との箒ほうきだの、頭の上からさがって来ているものを搔かきわけて、一間たらずの土間の隅につれてゆくと、並んでいる箱の硝子蓋ガラスふたをとって中の駄菓子をとれと教えた。当あてものをさせて、水絵みずえ——

濡らしてはると、西洋画風の蝶や花が、刺青ほりもののように腕や手の甲につくのを買わせた。で、彼女は一生懸命にお銭ぜぜの必用ひつようと、物品購買のことを説ききかせて、こういう細長い、まん中に穴のあいているのが天保銭てんぼうせんで、それに丸いので穴のあいているのを一つつけると、赤く光った一銭銅貨とおなじだと、繰くりかえしていった。でも、あたしにはあんまり必要がなかった。それよりも、お其の紹介で友達になった子たちが、自分の家の裏庭うちでとった、蝸牛まいまいつぶろを焼いてたべさせたりするのを、気味がわるくてもよろこんだ。

この子供仲間、男の子も女の子もみんな顔色がわるかった。どの子も大きな眼をして瘦やせていた。小僧さんかお付きの女中が

いるので、それらの眼をしのんで、こつそり集あつまるのを、どんなに
楽しみにしていたか知れない。だから裏から裏と歩いた。村田—
—有名な化粧品問屋—の裏を歩くと、鬢びんつ附け油を練ねる香においで臭
く、そこにいるまいまいつぶろ 蝸 牛 もくさいと言った。鍛治かじしち七—鍛治も
していた鉄問屋—の裏には、猫ねこ 婆ばあがいるということなど、
いつの間にか大人おとなよりよく知ってしまった。

猫婆ねこばあさんは真暗な吹鞆ふいご場に—その家も大かた鍛冶屋うちでもあ
ったのであろう。大溝おおぞうが邪魔をして通り抜けられない露路奥ろじおくに
なっていたので、そんな家のあることも、そんなお婆いさんの生いき
いることも、ほんとに幾人しかしりはしなかった。ただ猫だけが
知っていて、宿無し猫が無数に集ってきていた。いつもお婆さん

の廻りは猫ばかりなので、猫ぎらいなあたしは、お婆さんの顔の輪格りんかくもはつきり見知らなかつた。

「まだ生てるよ、顔だけあつたもの。」
なぞと、覗のぞいてきては子供たちはいつた。

土のお団子だんごなどをこしらえている時に、坊ちゃんぼうちゃんの一人が目附めつけだされて、連れかえられようものなら、その子は家うちへかえるのを牢獄ろうごくにでもおくられるように号泣した。残されるものもみんなさびしかつた。なぜなら、帰ればその子におしおきが待つているからである。なぜ表へ出て、あんな子たちとお遊びなさいました——とそれはまた、各自めいめいの身の上でもあるからなので——

あたしもよく引き摺ずつてゆかれて、お灸きゆうを据えられたり蔵えんの縁

の下に投ほうりこまれたりした。そうした窮屈な育てられかたをするのはお店の坊たなちゃん嬢ちゃんがたで、自由な町の子も多くあつた。それがどんなに羨うらやましかつたろう。そしてその多くの町の子たちが遊びの指導者でもあつたのだが、彼らはよく裏切りもした。あたしの祖母が、あたしの遊びに抜けだしたのを巖げんたんちゆう探中、その子たちの仲間の一人にお小遣いをくると、あたしは直すぐにつかまえられた。逃げでもすると、その子たちは追つかけ追い廻して、意地悪くとらえて祖母に突き出した。何なにがそんなに遊んではいけないのだろう？ 遊んでいけないのより、許おゆるし可をうけず外へ出るから、それがいけない、では許可をうければゆるしたか？ なんの、

「いけません、おとなしくお家うちでお遊びなさい。」

である。時たま家中の御機嫌のよい時外へ出して遊ばせてもらう。鬼ごっこ、子をとろ子とろ、雛ひな一丁おくれ、釜かまおに鬼、ここは何処どこの細道ほそみちじゃ、かごめかごめ、瓢ひょうたん箆へらぼつくりこ——そんなことをして遊ぶ。

子こを奪とろ子ことろは、親になったものの帯につらなつて大勢の子がいる。人とり鬼になったものが、どうにかして末しっぽの、尻尾しっぽの方の子をとろうとするのである。親になったものは、両手をひろげてふせぐ、鬼は、あっちこつちと、両側ねらを狙ねらつて、長い列さくらが右往左往すると、虚いとしこを狙ねらつて成功する——その時分、人さくら濞いとしこが多くあつて、あたしの従兄いとこも夕方さらわれていったのを、父が木刀をも

って駈かけていつて、かんだべんけいばし神田弁慶橋で取りかえしたという話もあるので、そんな遊びもしたのである。夕方になると子供を外に出しておくのを危険とした。そんな事で、外出もやかましくいったのかも知れないが――

釜鬼は、塀や壁を後にして、土に半輪はんわを描き、鬼が輪の中に番をしていて、みんな下駄を片っぽずつ奥の方へ並べておく。それをチンチンモガモガをしながら、輪の中へ取りにゆくのである。大挙して突進すると鬼が誰をつかまえようかと狼狽あわてる、それが附つ目めなのである。下駄が一ツ二ツ残ると、それから駈か引きひで面白く興じるのだ。

――瓢箪ひょうたんぼっくりこ――つながってしやがんで、両方に体を揺ゆす

つて歩みを進めて、あとの後の千次郎と、唱うたいながらよぶと、一番後の子が、へエイと返事をして出てくる。問答がすむと、その子がこんどは先頭になるのだ。

雛ひな一丁おくれは、ずらりと子供を並べておいて、売手が一人、買手が一人、節をつけて唄い問答する――

ひな一丁おくれ、

どの雛目つけた。

この雛目つけた、いくらにまけた。

三両にまけた、なんで飯まんまくわす？

赤のまんまくわしよ。

さかな
魚をやるか？

鯛たいとと魚くわしよ。

小骨がたあつ、

噛かんでくわしよ……

ここは何処どこの細道じやも唄うたうのだ。二人の鬼が手を組んで門をつくり袖を垂たれている。袖うしろの後に一人の子が隠されている。訪ねてくるものが、まず唄うたつて、鬼がこたえる。

ここは何処どこの細道じやく

天神様てんじんさまの細道じやく

ちつと通してくださいませく

御用のないもな通されぬく

天神様へ願かけに〜

通りゃんせ、通りゃんせ。行きはよいよい、帰りはこわい〜

袖があがる、訪ねるものは通ってゆく。こんどは隠された子をつれてくぐりぬけるのに鬼どもはいやというほどなぐろうとする。そうさせまいと走りぬけるのだ。

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年2月

入力：門田裕志

校正：小林繁雄

2003年4月2日作成

2012年5月19日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

旧聞日本橋

町の構成

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 長谷川時雨
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>